ヨハネ１２：２７～３６ａ　　心騒がせる神　　２６、３，１５

１，　今日の聖書箇所は、イエスさまが、ご生涯の最後の１週間をきっていた時の話です。この直前の箇所で、「人の子が栄光を受ける時が来た。一粒の麦は地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば多くの実を結ぶ」（ヨハネ１２：２３）と言っています。イエスさまは、自分が間もなく十字架にかかり死ぬことを自覚し覚悟しているのです。父なる神から人としてこの世に派遣された時から、すべての人の罪を贖い救うために死ぬことは分かっていたのです。罪のないイエスさまが、罪びとの罪を贖うため、罪びとの手によって十字架につけられるという、理不尽でありえないことに直面し心が騒いだのです。オリーブ山での祈りの時、汗が血の滴るように地面に落ちたともいわれています（ルカ２２：４４）。自覚しているだけに、いよいよその時が来たことがわかるので心が騒いだのでしょう。

２，　ついに、イエスさまは、２７節で「父よ、わたしをこの時から救ってください と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ」とつぶやいています。この時とは、いよいよ全ての人の罪を背負って十字架につく日が来たということです。自分はこの時のために、この世に遣わされたのだ。この使命をしっかり見つめているのです。しかし、イエスにとっ

ても十字架の死は大きな苦しみがあり、心騒ぐのです。この使命を何とか果たすために自分に言い聞かせながら、父よこの時から救ってくださいと言いたいのです。心の中で、「父よ、み心なら、この杯をわたしから取り除けてください。しかしわたしの願いではなく、み心のままに行ってください」（ルカ２２：４２）と語るのです。父のみ心に忠実に従ってこれまでも歩んできたし、最後の使命を果たすためにも従おうとしているのですが、心騒ぐのです。そして、２８節「父よ、御名の栄光をあらわしてください」と父なる神に言うのです。それを見、聴いていた父なる神は、すぐ応答し天から大きな声をかけるのです。イエスさまの苦悩をじっと見ていたのでしょう。「わたしはすでに栄光を現した。再び栄光を現わそう」と、イエスさまを激励するのです。神は、イエスさまの、み言葉と御業によって、すでに自分の栄光を現した。十字架の死と復活において、その栄光をさらに現わそうとしておられるのです。イエスさまの状況をじっと見ながら心痛めていたのでしょう。父も子もこころ騒ぎ、心に痛みを感じていたのでしょう。私たちも、この父と子の両方の痛みを理解したいものです。

３，　この箇所を瞑想していた時、詩人金子みすゞの「大漁」と題された詩を思い浮かべました。「朝焼け小焼けだ　大漁だ。大羽鰮（いわし）の大漁だ。

浜は祭りのようだけど　海のなかでは　何万の　鰮のとむらいするだろう」と地上と海の下のふたつの世界に、同時に目を注いでいて素晴らしいですね。

私たちも、困難にあった時や病気になった時に、そのことだけに目を向けると、落ち込んだり、なぜ自分だけがこんなことになるんだと思ったりします。このことを与えているのは、いつもそばにいてくれると約束してくれた神だ、これは何か意味があるんだと受けとめると意味が見えてきます。同じ病気だった人の苦しみがわかったり、人の祈りや親切に心が開かれたり等、いろいろあります。意味を見出すことによって前向きに受けとめられるようになります。どんな困難なことでも心の持ち方次第なのです。イエスさまと困難の両方に目を注ぐことにより意味を見出し忍耐ができ成長します。文芸評論家の小林秀雄も「困難な事態を試練と受け止めるか災難と受け止めるかが個人の人生でも一生の分かれ目になる」と言っています。

４，　さて、父なる神の声を聞いて、イエスさまは覚悟が決まり３０節「この声が聞こえたのは、わたしのためではなく、あなたがたのためだ。今こそこの世が裁かれるとき。今この世の支配者が追放される」と語ります。その意味は３２節「わたしが地上から上げられるとき、すべての人を自分のも

とへ引き寄せよう」とイエスさまは自分がどのような死を遂げるかを示そうとしてこう言われたとあります。イエスさまの十字架の死によって何が実現されるかを語っています。この世が裁かれ、支配者が追放されるというのは、この世を支配しているのはイエスさまと父なる神だということを証しているのです。神のひとり子であるイエスさまが、私たちの罪を背負って十字架で死ぬという驚くべき愛の御業によって、罪びとである私たちをご自分のもとに引き寄せ、救いの恵に導いてくださるのです。この世の支配者の支配から私たちを解放してくださるのです。イエスさまを信じるものが滅びることなく永遠の命を得るために復活して永遠の命を生きておられるイエスさまのもとに私たちを引き寄せて下さるというのです。このことを実現するためにイエスさまは、地上から父なる神のもとへ上げられるのです。

5，　その時、群衆が言葉を返して３４節「わたしたちは、律法によってメシアは永遠にいつもおられると聞いていました。なぜ人の子は上げられなければならないのですか」と反論したのです。彼らが考えている救い主やメシアのイメージが全く違ったのです。彼らは救い主は、ローマの支配からの解放をもたらし、民族の独立を実現してくれるものと考えていたのです。自分たちの願いを実現してくれるメシアを期待していたのです。それ

に応えてイエスさまは、３５節「光は今しばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないように光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩くものは、自分がどこに行くか分からない。光の子となるために、光のあるうちに光を信じなさい。」と語ります。光とはイエスさまのことです。光はいましばらくあるというのは、イエスさまが、十字架につけられるまで、あと数日だということです。光であるイエスさまを信じて光の子になりなさいというすすめです。復活後のイエスさまは、わたしたちにも、おなじように光の子となるようと、語っているのです。私たちもイエスさまの受難・復活を受けとめ信じて歩みたいものです。